語り手ハーパーの弟ティンとは何者なのか

Digging to Find the Truth About Little Brother Tin

長　田　恵　子*
Keiko Nagata

要　約　ソーニャ・ハートネットの『木曜日に生まれた子ども』（2000）は語り手のハーパーにより過酷な開拓者一家の現実世界と非現実世界が融合したドリームタイムが描き出されている。4 歳の弟ティンは川の土砂崩れの下敷きになったが，自ら穴を掘って生還した子どもである。しかし実際のティンはその時に川の泥に埋もれて死んだのではないか。本稿では，沈黙したまま地下に暮らし，穴を掘り続けるティンとは何者かを追求する。また彼らの父コートは，子どもの頃から自らの父親によるいじめを受け，抑圧された人生を歩んできた人物である。コートとティンとの関係をオーストラリアのアボリジニ神話の世界観と心理学における元型的影の表象からティンが何者なのかを読み解いていく。結果，作者がアボリジニ神話の中の影の魂をイメージしてティンを描き，ドリームタイムの中で父親コートの元型と融合した影として存在していたことを指摘するものである。

キーワード：アボリジニ神話，ドリームタイム，元型的影，抑圧，寡黙な子ども

Abstract　Sonya Hartnett's *Thursday's Child* (2000) portrays, through the eyes of narrator Harper, the harsh life of a pioneer family in Australia combined with Aboriginal Dreamtime. Harper's little brother Tin was, at age four, trapped beneath a collapsed river levee but came out alive by digging his own way out. Did the real Tin die under the collapsed levee? This paper will pursue the nature of Tin, who survived underground and continued to dig in silence. Tin's father Court, who was tormented by his own father, has lived a life of emotional suppression. In examining the relationship between Tin and Court through Aboriginal mythology and the psychological theory of archetypal shadows, this paper analyzes the nature of Tin. The writer has portrayed Tin as an Aboriginal "shadow soul." Tin is a shadow fused with the archetypal shadow of his father Court in Dreamtime.

Key words：Aboriginal mythology, Dreamtime, archetypal shadow, emotional suppression, reticent child

はじめに

ソーニャ・ハートネット（Sonya Hartnett）は 1968 年にオーストラリア，メルボルンで生まれる。13 歳で創作活動をはじめ，15 歳で *Trouble All The Way* を出版する。本稿で取り上げる『木曜日に生まれた子ども』（*Thursday's Child*）は，2000 年にオーストラリアで出版された。また 2002 年にはイギリス，アメリカ，カナダ，ドイツ，イタリア，ノルウェーおよびデンマークなど多くの国で出版され，その年のガーディアン賞（Guardian's Children's Fiction Prize）を受賞する。また，2008 年にはアストリッド・リンドグレーン記念文学賞（The Astrid Lindgren Memorial Award）を受賞する。

この作品はティンの姉ハーパーの語りにより，過酷な生活を強いられている開拓者一家の現実世界と，

*　日本女子大学大学院　人間生活学研究科　人間発達学専攻（博士課程後期）
Graduate School of Human Life Science, Division of Human Development, Japan Women's University

神話になった弟ティンとの非現実世界が混じり溶け込んだドリームタイム[1]が描き出されている。大人になったハーパーの語りは，写実的で，ティンを含む家族に起きた出来事を年代順に次々と報告していくのだが，果たして，ティンはどこまでが現実的な存在なのか。

本稿では，沈黙したまま地下に暮らし，穴を掘り続けるティンとは何者かを追求する。

ティンは無口な子どもであった。彼は 4 歳の時に川の土砂崩れの下敷きになったが，長い時間が経過したにも関わらず，自ら泥を掘って再生した。その後，土の中にトンネルを掘り，一人で暮らすことを選んだ超自然的な子ども（transcendental child）である。しかし実際のティンは 4 歳の時に川の泥に埋もれて死んだのではないか，それでは，この物語の中心的な役割を果たしている穴を掘り続けるティンとは何者なのか。実はハーパーがリアルなストーリーの中に組み入れた実在しない人物なのではないか。

またハーパーとティンの父コートは，子どもの頃から自らの父親によっていじめを受け，精神的に沈黙を強いられ抑圧された人生を歩んできた人物である。その彼とティンの関係をオーストラリアのアボリジニ神話の世界観と，心理学における元型的影の表象から読み解いていく。現実世界とドリームタイム，また神話の中の影の魂と元型的影の観点から，ティンがコートの深層意識の中で抑圧してきた子どもの表象，影であったことを明らかにしたい。

１．現実世界での無能な父，コート

この一家の現実世界はとても過酷なものである。1930 年代におけるオーストラリアの大恐慌は，開拓地に住む彼らを飢えの瀬戸際まで追い詰めていた。家族は父親のコート（Court），母親のソラ（Thora），姉のオードリー（Audrey），兄のデヴォン（Devon），次女ハーパー（Harper），弟ティン（Tin），そして物語の冒頭で末っ子のカフィ（Caffy）が生まれる。コートはなにをやってもうまくいかず，農作物を作ることも出来ず，野うさぎを捕まえてかろうじて食料にするだけの家族を養う能力に欠ける無能な父親であった。そのため貧困から抜け出すことも出来ず，ますます卑屈にならざるを得ない暮らしを強いられていた。

彼らが住むオーストラリアは当時，大恐慌時代であり，現実生活におけるこの開拓者家族の貧困は，極限状態に達していた。同じような貧しさの中にいる近隣者たちが見かねて助けてくれるが，自然の厳しさは思い通りにならない。母親は愛情深いが夫に従うだけで日々の生活に疲れている。姉は責任感が強く，この生活をなんとかしようとして犠牲的な行動をする。また兄は卑屈な父に失望し，徐々に父親を乗り越え成長していく。彼らの暮らしの描写は写実的で，時に厳しい現実の中で生きていくことへの力強さを感じさせる。

しかしながら，一家の大黒柱であるコートはなにをやってもうまくいかず，彼の卑屈に抑圧された心理状態によって，どうしても家族の暮らしは左右される。子ども時代のハーパーはいつも父親の行動を見続けていた。そして大人になってから物語の中で父の内面を捉えて回想する。その中には弟ティンが絡んだ非日常の世界が融合されている。

２．ティンとは何者か

1）アボリジニ伝承から：

ジュディス･アームストロング（Judith Armstrong）は，“Tin discovers a talent for burrowing in the earth. His digging takes him so far underground, and so far away from normal life, that he metamorphoses involuntarily into a different kind of being.”（156）と述べているが，ハートネットはこの物語を書くにあたり，日常にあるものが日常にないものと融合したマジックリアリズム的手法を用いている。また筆者は地中からが再生したティンを作者がアボリジニ神話の中のドリームタイムに生きるメルレ[2]のような大地の精霊的なものとしてイメージしたと考える。それはアボリジニの伝承に残る死霊の一種で人間の姿をしているという。伝承によれば，人間の「影の魂」の生まれ変わりであるとされる。そのような非現実存在をティンと重ね合わせて，作者はハーパーに物語を語らせたのではないだろうか。彼女はナレーターというよりストーリーテラーである。吟遊詩人のように現実にあった出来事を非現実のことと融合させて歌うように物語を紡いでいった。

物語の冒頭で末の息子のカフィが生まれようとしていたとき，ティンはそのとき 4 歳で，7 歳のハーパーがおぶうと鳥の羽のように軽く，青い瞳のたんぽぽ色のもじゃもじゃ髪，色黒で無口な子どもであった。 ハーパーはティンをつれて川辺へ行くが，土手の土砂崩れが起きたためにティンは土の中に埋

まってしまう。知らせを聞いた父はまるでティンに引き寄せられるようにその場所へ行き泥を掘るが，泥はぬかるんで，ほんのくぼみさえ掘ることが出来なかった。絶望の淵にたった父は“Take the new one instead. Take the new one instead.”（16）とティンと生まれたばかりのカフィとの交換をつぶやく。そこから非現実の世界が現れた。父は大地の泥と約束を交わしたのだ。その願いは聞き届けられ，ティンは自ら泥を掘って地面の下から手を伸ばし父の手のひらと重ねる。そこに立ったティンは以前の弟ティンではなく，地下の世界から再生したティンの影の魂かもしれなかった。なぜならこの後，死者の魂から生まれたメルレのように，ティンは地下に穴を掘り暗闇の中に一人で暮らすようになるからである。

父のコートは第1次世界大戦に従軍し，足の怪我と交換に土地を政府よりもらうが，彼は暗喩的に戦争中兵隊も馬も国も皆大地の泥に飲み込まれたという悲惨な体験をハーパーに話す。その泥からティンが救われたことは自分が救ったとしてコートをご機嫌にするが，ハーパーはティンが彼自身で泥を掘って生還できたことを知っている。アームストロングは，“the earth is a kind of divine element on which everything else depends;”と述べ，また David Rudd が“Caffy was born the day Tin learned to dig but this is also the day that Tin goes through a second birth to emerge from Mother Earth.”と述べているように，泥はすべてのものを飲み込み死へと誘い，また再生させる大地の母の要素である。

2）元型的影

コートは父親から言葉によるいじめを受けて育った。コートの父親は，コートが子どもの頃からずる賢く理不尽でいつも彼をだましていた。自分より頭のよい息子を妬み，嫉妬心すらもつひどい男だった。彼は自分のプライドを保つために息子を平気で戦争へ行かせようとする。息子が臆病のせいで，親まで臆病者呼ばわりされて平気なのかなどと言い，コートが断ると「おまえの子どもたちは一生臆病者の父のために恥ずかしい思いをすることになるだろう」と言う。コートは父に背くことができなかった。そのため否応なくコートは戦争へ行く。そして戦地へ行くと，そこに泥があった。コートは父親に死に送り出されたことを理解した。しかし父親に反抗することもできず，怒りを大人しく無意識下に抑圧して生きてきた。その怒りと共に，生きてこられなかったもう一人の自分である影の存在が，泥の中から再生したティンの影の魂と，文字通り手を結んだのだ。

「影とはその個人の意識によって生きられなかった反面，その個人が許容しがたいとしている心的内容である。我々の意識は価値体系をもっており，その体系と相容れないものは無意識下に抑圧される。」（101）ティンは元型としてのコートの影の役割を背負わされている。語り手ハーパーが引き出したコートの心の深層にいる影の表象としてティンは存在していたのだ。

> “That’s what I remember best- that Da’s hands were clean and white when it happened. He hadn’t touched those hands to the mud when another hand, a small and grubby flowerbud, a tiny little lost doll of a hand, broke through the earth and landed flat in Da’s glistening palm.”（17）

ハーパーは，その象徴的場面をよく覚えている。コートは精神的な父親殺しの通過儀礼をすることができずに育ち，本来の彼において可能性があったのにもかかわらず，そうなれなかった自分の影としてティンを神話にしたのだ。穴を掘る作業は，父なるものの抑圧から自分を守るために大地の母なるものの中へ逃げ込もうとする行為だ。そしてまた自分の内面をみつめる行為だ。しかし，実際のコートは穴を掘ることが出来なかった。

> “In the war, the one thing I wanted to do to the very best of my ability was dig, An important man, a general, once told the boys, Dig, dig, dig, until you are safe.　I could never dig deep enough, nor careful enough, , , I could never dig until I was safe as that general had told me to do.”（43）

コートは銃の名手で活躍し能力もありながら，自分の命を守る塹壕の穴をどうしても掘ることができなかった。これは父親を乗り越える通過儀礼に失敗したことの暗喩であるといえる。父なるものからの抑圧そして残酷な戦争での経験がコートの深層意識の中に抑圧されている。そのためコートの影であるティンは彼に代わって穴を掘るために再度生まれてき

たのだ。

３．穴を掘るティン

生まれたばかりのカフィは現実世界ですぐに病気で死にそうになる。ドリームタイムでの父と泥との約束が実行されそうになったのだ。コートは自分が泥に約束したことへの後悔で心の奥底へ逃げ込みたくてしかたがなくなる。するとコートの影のティンは，彼に代わって穴を掘る。コートは“Tin just likes being under the floor, I reckon.”（35）とティンの穴掘りを援護する。近所のマーフィおじさんも“You're letting him have his head, then? You're going to let him do as he pleases?”（46）とコートがさせていると言い，“That's right, Jack. I think that's best.”（46）とコートも肯定する。ハーパーもコートに“you like Tin being under the floor, don't you, Da?”“You gave him the pick, to help him.”（42）と言う。そして自分自身を守れるまで掘ることの出来なかったコートは,「ティンだったら一大隊分を一人で掘れただろう。ティンは天才だ。」と褒め称える。（38）

> “Maybe you don't need to be safe from something, Harper. Maybe you can just be safe - I don't know. I only know that, in the war, I couldn't dig to save myself, and I wasn't safe because of it. Maybe Tin is digging because every skerrick in him is demanding that he do it for himself. So I won't hinder him, if digging is what he wants, and I won't let anyone else hinder him, either.”（44）

コートは，自分では自分自身を守ることができないが，代わりにティンは掘ることができて安全でいられると分かっている。そのことを理解したハーパーとコートの想いが共有できた瞬間だった。この二人の想いが結実した姿がティンなのだ。

４．テリブルファーザー

ヴァンデリ・ケイブル（Vandery Cable）は，近隣の成功者であり，コートはいつも負い目を感じていた。ケイブルは，ハーパーたちにバケツを持ってこさせ，ティンのいる穴へ水を流せと命令する。

> “Pour water down the tunnel, and soon enough he'll bob up like a cork.”（46）“Not much difference in him being drowned or otherwise, far as I can see. It's lucky you've got these spares, flute, because that one's not much use to you. He certainly isn't earning his keep.”（47）

それに対してコートは爪をかみながら，弱々しくほほえむだけであった。そしてもっと高圧的でさげすむような態度のケイブルにコートはさらに爪を肉のところまでかんでいた。彼はケイブルから子ども扱いされ，馬鹿にされても言い返すことすら出来ない。ケイブルは，実の父に代わるコートにとってのもう一人のテリブルファーザー[3]である。コートはフロイト的に云えば父から去勢される不安を持ち続けていた。長男のデヴォンもコートが実の父から受けた仕打ちのように，働いた代金の約束を守ってもらえず，ケイブルの所から家に帰されてくる。それを知ったコートはケイブルのところへ談判に行くが，言い負かされ弱々しく足を引きずりながら帰ってくる。「できる限りのことはしたんだと言いながら。」（51）その直後ティンは突然，全力で穴を掘り始める。「ティンは遠くへ，遠くへと，今までよりもスピードを上げて掘っていった。自分を守るために。」（53）とナレーターのハーパーは語っている。これはハーパーが見つめるコートの心だ。ティンはコートの心に連動して文字通り穴を深く掘って行く。

コートの父親はコートにではなく，孫のデヴォンにわずかな遺産を残した。それでもデヴォンの申し出により，コートの念願だった肉牛を買う。“Beef's the way to go, you'll see. We'll be the envy of everyone.”（78）とコートが幸せでいるところにまたケイブルが来てここでは牛は育たないと見とがめる。幸せな気持ちでいるコートに冷たい言葉を浴びせ，散々馬鹿にして帰る。そして追い打ちをかけるように過酷な大恐慌が起きた。追い詰められ自暴自棄になるコートの目の前で，フルート一家の家全体がティンの掘っていた穴のために地下へ沈んだ。コートはうめき声をあげながら，自分を痛めつけ，爪を肌に食い込ませることしかできなかった。“All my life it's been one thing after another. I have an education, I used to go to dances, all I want is to be left alone—”（91）自分を傷つけている父を見かねて，ハーパーがしがみつくと顔を叩かれてしまう。そのとき今まで従順であった母のソラが初めて“Don't you hit that child! You are coward, you are, taking on like an infant.”（92）と

非難し,彼を見捨てて近所の家に子どもたちを連れて行ってしまう。ハーパーは千回たたかれても父と一緒にいたいほど父を愛していた。2〜3 キロ行った先からコートの姿を見ると，彼の姿が「ハーパーの心の中で一瞬ぼやけ，すっかり野生になってしまったティンの姿と重なって映った。」（89）ハーパーは父とティンを同一視しているのだ。

ケイブルに何かを言われる度に反論も出来ず，自分の爪を肌に食い込ませているだけのコートと違い，ティンはケイブルの蜂蜜を盗みつかまるが，決してあやまることもなく平気であくびをしながらケイブルにたてつく。その行為はティンがコートの心理を補償しているように見える。そしてコートが精神的に降下すればするほど，言葉通りにティンが穴を掘り下げていく。

ついに一番下の弟カフィが井戸に落ちて死んだ。父の願いどおりにティンとカフィは取り替えられ泥との約束が果たされたのだ。ティンも助けることが出来なかった。ティンの顔には敗北感と苦悩が浮かんでいた。それは父の感情でもあろう。そしてコートはいよいよ酒に溺れ，その辺をうろつき回って過ごすようになった。家族は極限状態までの貧困に陥り，近隣の人々の情けにすがらなければ生きていけないところまで落ちぶれてしまう。父コートは近所の親切に対しても哀れまれているとして，ますます怒り絶望する。デヴォンは，酒に溺れる父コートを臆病者扱いし軽蔑し，戦争に行ったのは，おじいちゃんが怖かったからだと言いハーパーも同意する。ハーパーは，コートが父親から精神的に去勢されたままの臆病者であることを理解していた。ティンは完全に野生化していた。

> “He’s a savage. He nearly didn’t stop, though he knew it was only me. He bares his teeth like an animal does when it’s cornered. He’s just a wild thing now.”（171）

ティンはコートの抑圧された影であり，コートが精神的に追い詰められるほど野生化し，凶暴になっていく。デヴォンは大事な馬を売りそのお金を置いて家を出て行く。姉のオードリーは家計を助けるためにケイブルのところへ働きに行き，彼からレイプされる。ハーパーは 12 歳になっていた。フルート一家は現実世界において最低最悪の状態にまで落ちた。父コートは完全に無力であり，無能であり，臆病者であった。そのことが彼の家族を不幸のどん底へ落としていたのだ。

５．ドリームタイム世界の出来事

事態はこの状況から急激に反転する。ケイブルのオードリーへの仕打ちを聞いたコートが，とうとう立ち上がったのだ。“No, he barked and I wish I could have seen him truly for I believe he stood taller than he’d ever stood before, tall and straight and dignified.”（186）とハーパーは語っている。ライフル銃をもちケイブルのところへ行く。戦争の古傷もない勢いで急ぐ後ろからハーパーも追いかけ，2 人でケイブルの家へたどり着くと，ケイブルは辺り一面に落ちている血の痕跡とともに消えていた。そのとき突然ハーパーの真下に穴が開き，あっという間にその穴へ落ちていく。光はどこにもなくハーパーは暗闇の世界へ落ちた。その穴はティンが掘った穴であり深層の世界である。どこまでも穴から抜け出せず，恐怖がこみ上げてくる。殺されると思った瞬間，ハーパーは穴から吐き出された。体中血まみれだが自分の血ではない。彼女はコートの心の中の深層世界へと穴を落ちて,父の子どもの表象ティンと会ったのだ。ティンはコートの代わりにテリブルファーザーの表象であるケイブル殺しに成功した。コートはここでようやくティンのもと通過儀礼を果たしたのだ。そしてハーパーはその目撃者であった。ドリームタイムの世界ではティンがケイブルを殺し，現実の世界ではそれはコートだといえるかもしれない。数ヶ月が経ち，どこへ行ったのか分からないケイブルの噂が消えた頃，近所のマーフィおじさんがコートを訪ねて来た。そしてみんながなんと言っているか知っているかと言った。

> “Everyone’s saying that wherever Cable ran to, he’s still running. They’re saying that, when he heard you were coming to exchange a few words, he took off faster than his jinker could move, that’s why he left it behind. He recollected he was only a hog man, you see, and that you yourself are a soldier. He could prance in lecturing you about this and that, but he couldn’t teach you a thing about looking after you and yours. You’ve become the most admired man around here, Court. Everyone’s

in awe of your honour, coming to your lass's defence like you did."（211-212）

そしてマーフィおじさんはよく分かっているともと言い，わけ知り顔の笑みを浮かべた。ハーパーはそれを聞いて，心をかき乱す。「あたしたちは決して逃れられない。たぶん。亡霊に取り憑かれている，永遠に。」（211）子ども時代のハーパーは，コートが現実世界でしたかもしれないこと，またはティンがドリームタイムの中でしたかもしれないことの両方の経験をしたのだ。

６．真の魂になったティン

ある涼しい春の夜，ティンが家族のもとを訪れる。「むき出しの手足，青白い肌，かみそりのような鋭いかぎ爪，しわの刻まれた顔は老人の顔で別世界に行きつつある顔だった。それは神話のティン。ティンは神話の人物だった。」（212－213）また彼は地面から浮いているように見え，背中に翼を広げて飛んでみても不思議ではなかった。（213）

ティンは役目を果たし，アボリジニ神話の影の魂から真の魂のような存在になったのだ。ハーパーはティンに見つめられ初めて微笑まれた。すると彼女の何かが消えた。それはハーパーの中に巣くっていた罪悪感がティンのもとへと行き，彼女の心が解放されたからだ。また彼は長靴くらいの大きさの金塊を家族へ置いていく。ティンには必要のないものであった。父の子どもの表象であるティンは大人のコートが出来なかったことを彼のために成し遂げた。「ティンは欲しいものを手に入れた。もう満足しているのだ。」（215）

そうであるならば，安易なハッピーエンドと捉えられがちなティンから渡された金は何を意味するのであろうか。それはコートにとって父なるものを克服できたティンからの褒美であり，分離していた影，抑圧していた深層にあったもう一人の自分との合一，自分自身の子どもの表象であるティンとの和解とみることができるのではないだろうか。それゆえ，アームストロングは“The lapse into further foolishness at the end of the book, when he sets about searching for more gold of which he has no need, is a return to his earlier self, a man prey to impractical fantasies."（160）と述べているが，そうではなく，“Da is weak, a bully, a spendthrift, and a drunkard, and makes foolish decisions that bring added hardship on his family."（160）であった父コートがこの時からどうしても出来なかった自分の手で穴を掘るという行為を初めて出来るようになったのだ。ようやくコートは精神的な抑圧から解放されることが出来た。そして自分の真の心を見つめ，逃げることなく自分自身を真の大人にすることが出来たのだ。その自立をコートの子どもの表象であるティンがドリームタイムの中で助けたのである。

おわりに

「児童文学で「穴」の世界として記述した世界は「他界」として存在するものではなく，むしろこの世と毅然一体としているのではないか。」と河合隼雄は述べている。（134）その穴の世界がティンのいるドリームタイムなのではないだろうか。ハートネットはこの作品においてアボリジニの世界観と神話的な人物をマジックリアリズ的手法で表現し，さらにコートとハーパーの深層世界へと穴を掘り下げて，7歳から12歳までの子ども時代のハーパーの目から見た出来事を 21 歳になったハーパーに語らせた。その子どものハーパーは，そのまま開拓地に残って生き続けていると物語の終わりで明かしている。“she did not come with me when I left the land. I think she is still out there somewhere, rebellious in her rage, scouring the tunnels for Tin."（216）大人になったハーパーが語っているのは，今も彼女の心の中にいる子ども時代の少女ハーパーであり，ドリームタイムに生きるティンである。そして父親の心の深層に生きている影の男の子ティンなのである。彼女はいつまでもティンを探している。いつかまたティンと会えるとしたらそれはハーパーも現実世界に生きていた初めの頃のティンと同様に土に汚れる時である。“His hand will be dirty when he places it in mine, and mine will not be clean."（219）この最後の言葉は，弟ティンは現実世界においてはすでに亡くなっていることの暗喩であり，ハーパーがこの世を去るときなのである。

アームストロングは，“Sonya Hartnett opposes two genres here, the family story（civilisation's basic unit）versus the myth of the wild."（159）と述べている。

父の深層世界の中の影に融合したティンと子ども時代のハーパー，その二人の神話が，フルート一家の日常の生活に溶け込んで，物語は作られたのだ。

この論文において，ナレーターを担っているハーパーが本作品の中で父コートを描写する場面と弟ティンの行動がどのように連動していくのかを取り上げながら考察した。その結果，作者がアボリジニ神話の中の影の魂をイメージしてその後のティンを描き，彼がドリームタイムの中で父コートの元型と融合した影として存在していたことを指摘するものである。物語は，今も父親を愛する大人のハーパーが語る彼女の心に住んでいる子ども時代のハーパーと父親の心の中に住んでいるティンによる現代の神話なのである。

【付記】 本稿は，2019 年 8 月 18 日にスウェーデンで行われた国際児童文学学会第 24 回大会での口頭発表に加筆修正したものである。

註

1 アボリジニは現在意識され経験される時間とは別に「ドリームタイム」という時間の概念をもっている。大地には精霊や祖先の魂が満ちていると考え，その神話を語り継ぐことで彼らは今もドリームタイムを生きている。またドリームタイムの世界はユング心理学の集合的無意識の概念とも類似している。夢見（ドリーミング）から実在が生じるという考えを持つ。アボリジニは 2 つの世界（夢見の世界と現実の世界）を並行して生きている。

2 アボリジニによれば，人はだれでも二つの魂をもっている。ひとつは心にやどる「真の魂」で，もう一つは「影の魂」だ。人が死ぬと，「真の魂」は神聖な泉にいって精霊になるが，「影の魂」は死霊メルレになって暗闇の世界へ行く。また他の部族ではモコイと呼ぶ。

3 テリブルファーザーとは，本来男の子が乗り越えて成長していかなければならない恐怖の父親像であり，通過儀礼として精神的な父親殺しを行う。

引用文献

1）Hartnett. Sonya. *Thursday's Child*. Walker books, London: 2002, 7.
2）Moran, Tom. “Thursday's Child: The Play” *Antipodes* 25. 2 (2011), Brooklyn, 220-221
3）Rudd, David. “Sonya Hartnett's Thursday's Child: Readings “Children's Literature in Education 35.2 (2004), 156
4）Judith Armstrong. “Sonya Hartnett's Thursday's Child: Readings “Children's Literature in Education 35.2 (2004), 156
5）ソーニャ・ハートネット『木曜日に生まれた子ども』河出書房新社，2004
6）松山利夫『現代アボリジニの神話世界　精霊たちのメッセージ』角川書店，1996
7）河合隼雄『ユング心理学入門』培風館，1967
8）河合隼雄『中空構造日本の深層』中央公論新社，1999

（指導教員：川端有子教授）